シリーズ先生（18）

# 心に残る教師たち

本間　真由美

## 群馬の教育風土

群馬の公立高校は男女別学が主流でした。商業高校や一部の普通高校は共学もありました。大学進学など考えもしなかったので、商業高校に行こうかなと思っていたのですが、進路相談の上、県立の女子校に進学しました。その高校は生徒会活動やクラブ活動が盛んで、中学までと違っていろいろな地域から進学して来る子がいて、中には親元を離れ下宿している同級生がいたのには、びっくりしました。女子校が普通だったから何の不思議も感じませんでしたが群馬特有のことでした。ただ女子校で良かったのは異性をさほど気にせず、伸び伸びできたことでしょうか。

## ユニークな教師集団と生き生き活動する生徒達

女子校というと校則が事細かに決められていると思うでしょうが、校則は「高校生らしい服装」という一つだけ。在学中校則に縛られた記憶はありません。制服はあったけどソックスや靴など人それぞれ色も形も違っていました。服装について注意されることはなかったです。昼休みになると校門を跳び越えて校外へ出ていく生徒も普通にいました。それをとがめる先生はいませんでした。何しろ先生達が自由だったのです。

生徒会活動やクラブ活動が活発でした。生徒会主催の講演会や映画鑑賞会が年に一度ありました。芥川賞を受賞した庄司薫の講演、山本薩夫監督の「戦争と人

間」の映画鑑賞が記憶に残っています。生徒の自主性を重んじていて、男子校との合同ホームルーム、裁判所の裁判傍聴、軽井沢の宿泊ホームルーム、どれも生徒達の要求で実施されたものでした。

生徒会総会で制服廃止について議論しました。賛成派、反対派それぞれに活発な討論でした。

3年生になると自主ゼミという、生徒が主題を決めて研究する学習がありました。そのゼミで交通事故で亡くなった友達の事故原因について調べ上げ、トラック運転手の過失を突き止めたグループがありました。先生達の徹底したサポートがあったことと思います。全校生徒の前でその経緯を発表してくれました。

地学の先生は三島由紀夫事件の時、授業の中で三島についてその屈折した生き方について教えてくれ、「三島は馬鹿だ」と授業中に語っていました。現代国語の先生は、松本清張の「霧の旗」を教材として授業したことがありました。

世界史の先生は「先端恐怖症だから、ぼくは尖ったものはだめなんです」という人。社会科の先生はユニークな人が多かった。倫理社会の小山先生は教室に入って来るなり「甥っ子が自衛隊に入るなんて言ってるから困る」と言って嘆いたことを覚えています。女性が結婚に憧れを持ちすぎることに疑問を投げかけていたこともありました。日本史の黒沢先生は、髪を輪ゴムで束ねていた。友達がカネボウ製品の不買運動してると言ってたことを覚えています。第二次世界大戦の授業の時は防空頭巾を被り、もんぺをはいて戦時中そのものの格好で授業をしてくれました。高校三年の試験休みの時、現代史が教えきれなかったからと希望者に特別授業をしてくれ、戦争前に現役軍人が大臣になれるという法律を決めたところを強調して教えてくれました。女性の選挙権が認められたのは戦後になって初めてというところに教室中がざわめいたこと、女子校ならではかもしれません。

市川房枝のことはこの時知りました。自由民権運動の活動家植木枝盛が18歳選挙権を主張していたことも。日本史の教科書は家永三郎が著者でした。進学校ではありましたが、受験に特化した授業は一切やらない高校でした。今から50年も前のことですから、結婚したら女性は退職して家庭に入るのが主流。腰掛け仕事なんていう嫌な言葉もありました。そのせいか専門職につきたいと思ったのです。選択肢の一つが教師でした。

## おわりに

看護師になろうと思ったけど、人の命を扱うことが怖くなり、一年浪人して運良く教育学部に進学。そこで出会った友人たちは一生の宝です。教師を続ける中で、国の方針のおかしなところに息苦しくなることもありました。でも高校で出会った個性的な先生たちから生き方の根っこを植え付けられたようです。疑問をもつこと、自分で考え行動することの大切さ。国の方針に素直に従う教師でなくてよかったと思います。だから定年まで勤められたと思います。定年を待たずに辞める女性教師が多かったですから。

今、教師のブラックな働き方が注目を集めています。教師不足も深刻です。教育基本法が改悪されたころから危機感をもっていましたが、ますますひどい。再び戦場に教え子を送るようなことにならぬよう、行動しなければと思っています。

（ほんま　まゆみ・新潟市）

## 「親愛なるレニー」を読んで

２０２３年6月7日の朝日新聞に、河合隼雄物語賞にハワイ大学アメリカ研究学部教授、吉原真理さんのノンフィクション「親愛なるレニー　レナード・バーンスタインと戦後日本の物語」（アルテスパブリッシング）が選ばれたという小さい記事がのっていた。

ウクライナではドニエプロ川のダムが攻撃で崩壊し、そのニュースを聞いているときに、新潟県立図書館からその本を借りて読んでいた。

私とレナード・バーンスタインの関係は、演奏会での一聴衆だったことである。それは、１９７９年6月27日（水）18時30分新潟県民会館でのニューヨークフィルハーモニックのマーラー交響曲第1番ニ長調「巨人」の演奏会。一生の思い出になった。

晩年、命をけずって、札幌の若い学生たちのオーケストラの指導にあたっていた。音楽が少しでも世界の平和につながるように祈らずにはいられないし、性的マイノリティの人たちの差別や偏見がなくなることを願ってやまない。

（伊藤）